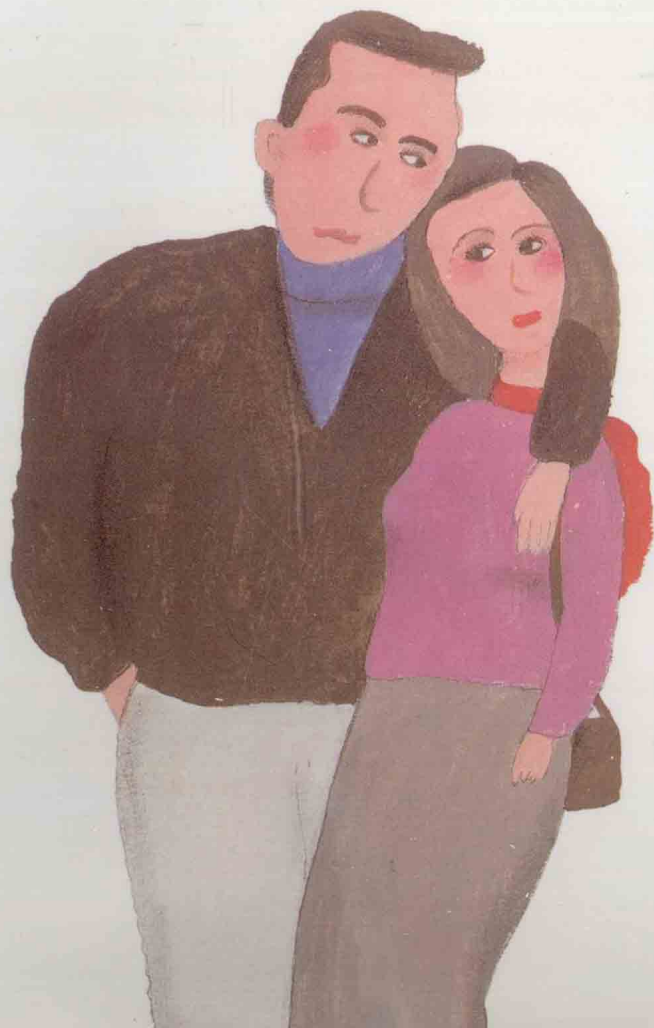


男って何ですか

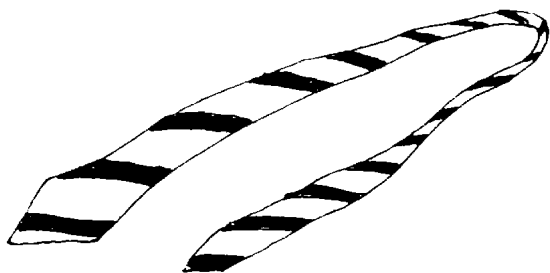
三浦朱門

海竜社



男って何ですか

三浦朱門



海竜社

著者紹介

作家。大正15年東京生まれ。東大言語学科を卒業後、日大芸術学部の教職に就くとともに、第15次「新思潮」に加わり作家活動に入る。中国西域を扱った『冥府山水図』が文壇デビュー作となった。昭和42年、社会と家庭に於ける人間の関係を扱った『箱庭』で第14回新潮文学賞受賞。以後も『犠牲』『楕円』『正四面体』など次々と話題作を発表、また独特のユーモアとエスプリを活かしたエッセイ『愛からの出発』『結婚なんかおやめなさい』などベストセラーも数多い。

男って何ですか

定価九八〇円

昭和五十五年十一月九日 第一刷発行
昭和六十三年五月十二日 第七刷発行

著者 三浦朱門

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二の九の二 千一〇四
電話東京〇三(五四二)九六七一(代表)
振替 東京一四四八八六

印刷所 白陽舎印刷工業株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

落丁本、乱丁本はおとりかえします

は
じ
め
に

バージニヤ・ウルフの女性論——これは女性による女性論という意味で興味深いものだが——の初めに、女性論の資料を集めに大英図書館に行くと、女性論は汗牛充棟もただならぬありさまなのに、男性論となると二、三冊しかなかった、と書いてあった記憶がある。

元々、読書人口は男性が中心であった。だから、多くの書物は男性向きに、男性読者の要望にこたえるように書かれていた。だから女性論は男性論を圧倒しえたのである。しかし、女性が相手にしてくれないもので、やけになった男が、酒を飲み、バクチをやっている間に、女性たちは本を読んでいるようである。今や、読書人口の中心は女性なのだ。一つには、女性は男性が作る社会体制から閉め出されているために、本を通して人生を間接的に体験しようということもある。同時に女性の社会進出も著しく、学校でも職場でも、男と女は肩を並べて活躍するようになった。

こうなってみると、男と女の間がどうもギョチないのである。男もいけない。たとえば能力ある女性の下で、情熱をもって働く男はまだすくない。共かせぎの夫婦で、女房の方が収入が多いのは男のコケンにかかわるという男、みつともなくて、マーケットに買出しに行けるかという亭主もまだまだ多い。

しかし、女性の方も男を見る目が単純にすぎると思う。能動的な立場では、夫、または恋人、ボーイフレンドとして好ましい男と、そうでない男、受動的には、自分と寝たがる男と、そうで

ない男、といった分け方しかない。しかし、女性が人間であるように、男だって人間なのだ。ただ、女性を意識した男は、つい人間でなく、雄になってしまふ。それは多分、女性にしても同じことなのだろう。男は本当にそういう事態を望んではいない。雄になるのは一時的現象であつて、勉強している時、仕事をしている時、彼は人間なのだ。だから、ホモの男を除いて、男は男だけの世界にいる時、妙におちつけるのである。

ただ、女性が男性を見る時、当然のことながら、彼は人間的であるより雄的になっている。ならないとすれば、彼は相手を女性として認めていないのだから、女性にすれば失礼千万というところかもしれない。

ところが、男は雄になるのがヘタというか、妙にギョチない。てらいや偽悪性がある。まれにはごく正直に雄そのものになれて、人間らしさのすくない男もいるのだけれど、そういう一部の男性のために、私たち男性は誤解されているように思う。私はいわば一種の女性向けの弁明としてこの本を書いたのだが、男性からも、たとえば、いやお前の考えは女性におもねりすぎるといった批判を寄せられることを期待したい。

一九八〇年九月

三浦朱門

目次 男って何ですか

はじめに——1

第1章 夫の顔と男の顔——11

1 ウチの宿六は二重人格——13

2 家庭の顔は男の恥部——25

第2章 タダの我が家とツケの飲み屋——33

1 男にとって家庭とはタダで住む場所——35

2 男はなぜ飲み屋に行くのか——41

第3章 男は三界に家なし——49

1 家とはつねに女の物である——51

2 宿無しは男の宿命——58

第4章 女に理解しにくい男の仕事——69

1 女にとって不可解な男の仕事——71

2 質と量を明確にとらえられないのが男の仕事——80

第5章 恐ろしい女が産む我が愛し子——89

1 ほんとうにオレの子か？——91

2 子は誰のモノか——99

第6章 男らしさとはヤセガマンの美学——115

1 国家は男性的、社会は女性的——117

2 男とはヤセガマンをする人類——121

3 何のためのヤセガマンか——130

第7章 戦わない男たちはどこでヤセガマンをしたか——141

1 平和という戦場での勝利と敗北——143

2 遊びに求めるヤセガマン——154

第8章 男が抱く幻の女性・現実の女性——173

1 母よ、妻よ、恋人よ——175

2	男のライバルとしての女性	193
---	--------------	-----

第9章	男が作りあげる「男の世界」	209
-----	---------------	-----

1	男の能力を結集する政治集団	211
---	---------------	-----

2	男社会はホモ集団	218
---	----------	-----

第10章	男の心に潜む女への怨恨	229
------	-------------	-----

1	男の欲求を満たす女のポケット	231
---	----------------	-----

2	女なんか消えてなくなれ	240
---	-------------	-----

装帧——
摊本唯人

男って何ですか

第1章

夫の顔と男の顔

男は、家庭と外では多少とも二重人格になる。

男にとって、妻は家にいないと不便な存在、

失なう恐れはあるが、性的危機感のない存在だ。

家ではウシの如きブタの如き男も、外では、夫でもない父でもない、抽象的な男に立ち戻る……。

1 ウチの宿六は二重人格

男が病みほうけて帰る場所

初老の大学教授がいた。一応タレント教授のクチであつた。(私ではない。私は教職をひいて十一年になる。)五十をこした時、学生とテニスをしていて、捻挫をした。精密検査の結果、骨折もしていることがわかつた。入院治療中に、担当の三十前後の女医と恋仲になつた。

元々がしゃべったり、書いたりするのが商売、というより、そうせずにはいられない人間で、しかもそれで食ってゆける人である。そういう男がベッドで暇をもてあまして、そのはけ口を婚期を逸しかけた女医に求めた。十万の読者、百万の視聴者のための言葉を、たった一人に向けたのである。当然、内容が濃い。患者の相手をするに空虚感を覚えはじめていた三十の整形外科の女医が、ふと二十歳の年の差を忘れたのも無理ないことかもしれない。なかつた。

何年かたつた。勿論、その間、教授は女医とのことを夫人に知られ、子供から責められ、とい

う事態に立ち至った。彼は女医のマンションにころがりこんだ。大学の月給は夫人の所に、出演料、原稿料の類いは教授の所へという分裂経済が続いた。

その心労がたたったのだろうか、年の割りには若々しかった教授は、痔の大手術をし、輸血のために肝炎を患って、半年近い入院生活を送ることになった。退院の際、彼は女医の所に戻らなかった。彼女は丁度、学会で留守にしていたこともあるが、逆に、その時をねらって退院した節もある。教授は私に言った。

「病みほうけて帰るのは、薬瓶下げて戻るのは我が家だよ」

私には何となく、わかるような気がした。そして、夫人も黙って彼を受け入れたようであった。しかし、それほどメデタシ、メデタシという訳ではなかったらしい。たとえば、彼がテレビで野球を見ているとすると、夫人がパチンと消してしまい、

「あなたにはそんなに面白い思いをする資格はありませんよ。あたしはこの四年間、どんな思いをしてくらしていたのか」

すると教授は返す言葉もなく、暗いブラウン管を見つめるのだという。

全く女房にしてみたら、亭主がよその女の所に行ってしまうのは情なからうが、病みほうけて帰ってこられるのも業腹なことであろう。それも、女が奪い返しに来るといふならまだしも、女医の方は彼女なりのプライドがあるのか、教授をもて余しかけていたのか、音沙汰ない。だから